

元山から下関まで恐怖の逃避行の二十日間の行程は、病弱な父には、座ったきりの足の関節と筋肉を衰えさせ、栄養失調は、持病を兀進させ、引揚げ後十一年、七十六歳で死亡するまで苦しみ通したことは可哀相でならなかった。

南鮮で兵役に服していた兄、予科練に入っていた次兄は、現地除隊後、単独に引揚げていて、私たちを迎えてくれた。

喘息に苦しむ父は、姉妹に連れて帰ってもらうことができた、死ぬまでいつも口にしていた。兄妹四人、それぞれ寮のある下場で働きました。

悲惨な戦争はあってはならないこと、国あつての国民であることを痛感したことから、君が代と日の丸のモチーフを胸に刻んでほしいと考えています。

終戦後、帰国をはたせなかった多くの人が、異郷で死んでいった。その怨念を忘れてはならないし、哀悼の意を表したいと思います。

むくわれずに、父母よ

山口県 高木 徳子

私たちは、亡き父母が若い頃、朝鮮に渡り、私は朝鮮で生まれ育ちました。

父母にはいろいろの苦労があつたと思いますが、私は、京城（ソウル）の郊外の永登浦という所で幼稚園、小学校、女学校に通い、不自由なく暮らしており、終戦を迎えました。

父は朝鮮の土になると決めていたようですが、全員引揚げの通達があり、それではと準備に取りかかりました。持てるだけの荷物を持って帰り、後の荷物は決められた個数だけ、政府が責任をもって預かり、人員輸送がすみしだい送るからといわれ、指定の倉庫まで自動車で運びこみましたが、その荷はついに帰らず、没収されてしまいました。

大人から子どもまで、自分にあうリュックを作り、そ

の中に衣類を入れ、背負う練習を始めました。重い物を持ったことのない私たちですから練習しないと重い荷物ですと、後ろにひっくりかえり歩けないからです。少しでも多く持って帰ろうとへらして見たり、ふやして見たりで、泣き笑いの練習風景でした。その頃、いろいろなデマが流れ、不安な日でしたが、今まで家で働いていた朝鮮の方たちがお米や野菜を田舎から持ってきてくれ、引揚げの日まで手伝ってくれました。ほんとうに嬉しかったと母はよく話していました。これも、父が使っている人たちの接し方がよかったからだということもあつたわけです。

出発の日が決まり、竜山の駅まで荷物を連んでもらい、貨車に積みこみ、その上に座っての旅立ちです。その道中はたいへんなもので、お便所のない貨車で、特に女の人は、停車しなければ用も足せないありさまでした。ときに貨車は止まって動かなくなり、釜山までの道の長かったこと、着いた時は、へとへとでした。荷物の検査、身体検査を受け、やっと船に乗りこみ、私たちが家族は十畳ぐらいの部屋をもらい、ゆっくりと博多に着く

ことができました。博多から列車に乗りこみ、徳山で降りるときに、窓から荷を下ろしてもらうようになっていましたが、ここで荷物を一個おろしそこね、列車とともに消えて行きました。祖母のリュックでした。海を渡ってここまで持って帰ったのにとくやしい思いました。別府の伯母の家に十二人が世話になりましたが、食べざかりの子どもや孫を抱え、母は毎日食糧の買出しにたいへんな思いをして、引揚げ時に持ち帰った衣類を持って行きました。父はこの食糧難を解決するには自分で作るほかないと知人の世話で田舎にはいり、農業を始めました。経験のない私たちの苦労はなみだっているものではありませんでした。父が「おれは京城に骨をうめる」といい、買い求めた山や土地も、預けた荷物も返らず、なんのむくいもないまま、さびしく亡くなった父母がなんとも哀れでしたありません。忘れてしまわないうちに子どもたちに話してやりたいと思います。